研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-169		17-070	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　三浦克之

題名（原題／訳）

Alcohol use and sickness absence due to all causes and mental- or musculoskeletal disorders: a nationally representative study.

精神疾患、骨格筋疾患および全疾患による病欠と飲酒との関係

執筆者

Kaila-Kangas L, Koskinen A, Leino-Arjas P, Virtanen M, Harkanen T, Lallukka T.

掲載誌

BMC Public Health. 2018 Jan 17;18(1):152. doi: 10.1186/s12889-018-5059-8.

キーワード	PMID
節制、アルコール使用障害、精神疾患、病欠、作業能力	29343233

要　旨

目的：

飲酒による病欠の関係を飲酒量の別、また生涯非飲酒者、過去飲酒者、アルコール使用障害の有無で検討し、また病欠の原因疾患別（全疾患、精神疾患、骨格筋疾患）との関連も検討した。

方法：

参加者は The Health 2000 Study のうち、面接と健康検査に協力した 3,666 人の 30～55 歳のフィンランド人。飲酒程度は調査票で、慢性身体疾患は臨床的評価で、精神疾患とアルコール使用障害は統合国際診断面接（the Composite International Diagnostic Interview, CIDI)）にて評価した。コックス回帰にて多変量調整ハザード比とその 95%信頼区間（95%CI）をもとめた。

結果：

少量飲酒者と比較してアルコール使用障害者は全疾患による病欠リスク（多変量調整ハザード比[95%CI]　1.27[1.04 – 1.54]）と精神疾患による病欠のリスクとが増加した。生涯非飲酒者は少量飲酒者と病欠のリスクが変わらないが、大量飲酒者と過去飲酒者は精神疾患による長期病欠リスクとの関連があった。飲酒と骨格筋疾患による病欠リスクとの関連は認めなかった。

結論：

過去飲酒者は病欠リスクと関連があった一方、生涯非飲酒者は関連を認めなかった。アルコール使用障害患者および大量飲酒者は精神疾患による病欠の強い予測因子であった。職場健診等で飲酒過多者を特定し、精神衛生上の支援することが病欠の予防になることが示唆される。